

研究ノート

## 韓国産育民俗の一側面

### ——男児選好の背景と変容を中心に——

坂元一光<sup>※</sup>

#### はじめに

「性的選好」とは、一般に産まれてくる子供の性別に対する親や社会の期待のあり方を示し、主として、人口学関連の領域で頻出する用語である。英語では、通常「sex-preference」の語があげられているが、時に「gender-preference」の語が用いられることもあり、社会・文化的領域との関連の深さを物語っている。また、多くの場合それは様々な産育技法や産育儀礼のなかにも反映され、当該社会の人々（特に親たち）の産育をめぐるひとつの集合的な心性を表現するという意味で、すぐれて民俗的な現象といえる。さらに、この性的選好は政治、経済、社会、文化等多方面の領域と深く結び付いており、社会によって多様な展開を見せる。それゆえ、特に子供や女性を中心とした産育習俗について「比較民俗」的関心を持つものにとってはきわめて興味深いテーマでもある。

小論では、この性的選好の問題を韓国社会のなかで考えてゆく。韓国においては伝統的に男児の誕生が強く期待されてきたといわれる。すなわち性的選好のひとつのパタンである「男児選好」(son-preference)が存在してきた社会と考えられている。周知のように韓国は伝統的に父系血縁を非常に重視する社会であり、族制をはじめさまざまな社会・文化現象も「父-息子」のラインを中心に展開する。いわば社会の構造的要請の結果として男児出生への期待も高かったと考えられるわけである。ただ、このように一見、単純な韓国の男児選好については、管見するところ、あまり正面から論じられる機会が少なかつたようである。

もちろん、民族学や人類学あるいは社会学や人口学のなかでその理由や背景について断片的に語られることは多い。ただ、この問題を正面から取り上げ、そこに収れんしてくる要因について、社会や文化の様々な角度から全体的に検討したものはあまり見あたらないように思われるのである。

上記の認識に基づき、今回は、まず韓国の男児選好に関わるいくつかの伝承や統計資料を紹介しつつ、その民俗現象や意識調査に現れた実態を示す。つぎに、この一見、単純な構造を持つ韓国の男児選好が、密接な関連を持つと思われるいくつかの背景に着目しながら、それが現実生活の中で見せる具体相を示す。さらに、今日の韓国社会のなかでそうした背景がどのように変化しつつあるのか、社会学的な統計資料など参考に、ささやかな展望を試みるものである。

#### 1. 伝統的男児選好民俗

生まれてくる子供の性別への関心のあり方としては、通常、次の三つの形態が考えられる<sup>1)</sup>。まず男児の出生を期待するあり方、次に女児の出生を期待するあり方、そして生まれてくる子供の性別に特別な関心を持たないという場合である。韓国社会においては、よく知られているように男児の出生への期待が強く、いわゆる男児選好の傾向が強い。韓国の男児選好についてはこれまで、人口学や民俗学、人類学あるいは社会学などの領域において、それぞれの関心に沿った視点からこの問題に言及している。

例えば人口学の領域では性別選好、特に男児選

※光陵女子短期大学助教授

好は人口動態（増加）に強い影響を及ぼす社会要因と考えられており、韓国の人口政策のための重要なテーマのひとつとなっている<sup>2</sup>。直接に男児選好の用語が用いられることはないが、韓国社会における人々の男児出生への強い期待に関しては、民族学や人類学あるいは社会学の領域において、韓国の父系的な族制との関連の中で断片的に触れられている。かつて、秋葉隆は『朝鮮民俗誌』において伝統的な家族制度を背景に展開される祈子信仰を紹介する中で「祈子の子は男児の意味」（秋葉 1954：124）と明確にその存在を指摘している。さらに、最近では『木の雁』（竹田 1983）において韓国の男児選好の具体的な様子とその背景についてある程度まとまった形で紹介されている。また家族社会学では伝統的な家系継承観を把握するための重要な項目として頻繁に登場する（例えば 崔 1982：312）。あるいは子供の性役割の問題として幼児教育の中で論じられることもある（柳 1986：44）。このように韓国の男児選好が様々な学問分野で言及されるのは、その問題が社会生活の広い領域にわたっていることのひとつの証左であろう。ただ、関心のあり方はそれぞれの分野ごとに異なっており、例えば人口学では男児選好の実態とそれが人口動態に及ぼす影響の測定に関心が向けられ、民俗学や人類学あるいは社会学では、主たる関心はそれが生み出される社会・文化的な背景およびそれらの間の関連に向けられている。

小論では、まず手始めに、この伝統的な韓国の男児選好の実態を、産育習俗を中心とすることわざ、通過儀礼、呪術などの象徴的な文脈のなかに探ってゆくことにする。

#### （ア）ことわざ

○寿富貴は多男子

（寿は長命、貴は地位などが高いことで、いずれも伝統的な福の観念）

○三男一女は玉皇上帝もうらやむ

（玉皇上帝は道教という天上界の神で万物の主宰者）

○息子の幸福が私の幸福

○多男は天福

○息子を生めない女は、涙の洗濯物が尽きる日がない

○私が息子を生む日が彼が私の夫になる日

（息子を生むことによってはじめて女は夫の妻としての地位を得ることになる）

（以上、柳 1986：45）

#### （イ）産育儀礼

韓国では出産のあった家の門にクムチュル（インチュル）という一種の注連縄を張る風習があった。これは外部からの不浄や悪鬼の侵入を防ぎ、生まれた子供をそれらから守るためのもので、家族以外の人々はクムチュルが掛けられている間は、その家への立ち入りが禁じられていた。その代わりクムチュルには赤トウガラシや松葉や炭（男児）あるいは白紙や松葉や炭（女児）などをつけて、生まれた子供の性別を部外者に表示した。『朝鮮風俗集』によるとかつての開城あたりではこのクムチュルの代わりに男児が生まれた場合には「産慶忌不精」、女児の場合には「有産忌不精」という漢字とハングルそれぞれの文字で書いた紙を門に貼りつけたという（今村 1919：306）。産慶や有産という文面の違いから、生まれてくる子供に対する人々の期待度の違いをうかがい知ることが出来る。

#### （ウ）婚姻儀礼

韓国の伝統的な婚姻儀礼に結婚式を終えた後、新婦が新郎の家族と正式に初対面する幣帛（ペベク）という儀礼がある。その際、舅と姑は新婦に対してナツメの実を投げて多産を祝することになっている。今日でも京畿地方においては、その時「息子はたくさん、娘は薬味（程度）」と唱えるという。（柳 1980：223）

#### （エ）祈子呪術

子供や男児の出生を祈願して家族や婦人によって行われる様々な呪術・宗教的行為は、一般

に祈子と呼ばれている。祈子にはその方法によって神仏への誠意(祈願)をもって子供を授かろうとする致誠祈子と民間呪術的方法による呪術祈子とがある。そのうち特に呪術祈子のなかに母体内の胎児を女兒から男児へと転性させる呪術もあった。例えば、斧を秘かに妊婦の床の下に置いておくと女兒を転じて男胎になし得るとか、雄鶏の長尾二箇を妊婦に知らせないでその寝床の下に置くと男胎に転ずるとか、弓の弦を妊婦の腰に縛りつけ満三ヶ月にして解くと胎児の性が意のごとくなるなどと言われていた(金 1934:42, 柳 1986:150-153, 秋葉 1954:122)。

以上、ごく限られた資料ではあるが、そこからは当時の人々の男児の出生に対する強い願望が十分にうかがえる。韓国の男児選好の伝統は、とりあえず、このような様々な民俗的文脈のなかに見出すことが出来るのである。

## 2. 現代の男児選好意識

さて韓国の男児選好について、特に、その伝統的側面を中心に見てきたわけであるが、それは急激に変化する現代においてどのように継承されているのだろうか。残念ながら、今のところ現代韓国社会における男児選好民俗の維持、あるいは変化についての民俗学的な報告を見だし得ていない。しかし、現代社会における人々の男児選好に対する考え方を知る手がかりが全くないわけではない。例えば、社会学や人口学、あるいは社会心理学などの領域でも、様々な目的のために子供の社会・文化的価値に関する研究を行っている。意識調査に基づく統計的な分析が主であるが、それは現代社会における大人の子供に対するひとつの意味づけのあり方を知る上で重要な手がかりになると思われる。そこで、以下、そのうちのいくつかの資料を紹介しながら現代の韓国社会における男児選好の意識と行動について見てみよう。

1970年代における人びとの意識面に現れた男児選好について、これを正面から取り上げた調査資

料として、韓国行動科学研究所(K. I. R. B. S)が行った「男児選好と家族計画」に関する研究がある<sup>3</sup>(Lee and Lee 1973)。対象として1970年の韓国国勢調査の基礎となったソウルをはじめとする都市および農村地域から有配偶者可妊女性(15才~44才)1883名が抽出され分析された。報告は居住地域、学歴、収入など様々な変数を絡ませ男児選好の実態や背景を分析し今後の家族計画のあり方を探ろうとするものである。詳細な数表はここでは省略することにして、大まかな概要だけを紹介する。まず、当時の調査対象者に理想的な子供数と性比とを問うたところ、理想子供数は3名(53%)、4名(24%)、5名(15%)の順に多く、また理想の性比は3名の場合が男児:女児/2:1(3名が理想と答えたひとの96%)、4名の場合が同じく2:2(77%)、3:1(22%)、5名の場合が男児:女児/3:2(96%)という結果がでている。一般に、こうした性比に関する調査においては、選好の度合は奇数の子供数に注目するが、この調査結果からは奇数の子供数を希望した者のほとんどが、男児の数を多く望んでいることが明確に分かる。

次に全体の中で最も多かった理想子供数3名と答えた婦人に対し、三通りの子供の性比の組み合わせを提示し、それぞれの子供の組み合わせが実現したとして、それ以後の家族計画の実施に対する態度を尋ねた。男:女を2:1の割合で持っているとした場合90%が家族計画を実行すると考えた。しかし一方で、子供の男女比が1:2の場合49%、男女比が0:3の場合26%が実施するとの結果であった。このことから十分な男児数を確保しないうちは、必要以上の出産を継続しようとする意識が明瞭にうかがえる。人口政策における男児選好の問題がまさにここにある。

1975年から1976年にかけてアジアの5ヶ国(台湾、日本、韓国、フィリピン、タイ)と米国(ハワイ)を対象に実施された子供の価値に関する研究においても韓国における男児選好観の強さが報告されている(Arnold and Kuo 1984)。この調査は子供を生み育てる際の経済的、社会的、心理

的なコストとベネフィットに関する国際的共同研究として行われたもので、その中には男女の性別も重要な因子として取り上げられている。このなかでアーノルドとクオは「IS スケール」と呼ばれる性的選好度を測る質問紙を用いて各国の性選好度を調査している。IS スケールは独自の質問紙を用い、これを統計処理して性的選好度を1ポイントから7ポイントまでの数値として表すものである。ポイント7は最も強い男児選好度を示し、ポイント1は最も強い女児選好度を示す。ポイント4はその中央値として子供の性に対する社会的な選好が存在していないことを表している。(前掲書：301)

調査の結果、上記の8ヶ国の中で韓国と台湾が最も強い男児選好度を示し、両国の調査対象者の男女の90%以上がIS スケールの5ポイント以上すなわち男児選好の意識を示し、かつその半数以上が女児の2倍の数の男児を望んでいることが判明した(同書：302)。

また、人口学の李興卓も同じIS スケールを用いて1974年(全国)および1981年(慶尚北道)の韓国の男児選好度を調査した結果、いずれも5ポイント以上を示すことを指摘している(李 1988：148)。さらに、李はこれを人口抑制政策の阻害要因としてばかりでなく、将来的に国全体の男女性比の不均衡現象を引き起こす要因としても警告している<sup>4</sup>。この他、家族社会学の韓は1950年代以降の家族社会学における子供観についての意識調査をフォローしながら、今日まで継承されている男児中心主義を指摘している(韓 1989：56-59)。

また、人びとの「行動面」における同様の傾向の存在を示す報告もある<sup>5</sup>。例えば、李&李は韓国保健研究院が実施した全国家族保健実態調査に基づき、避妊実践率や授乳様態、中絶頻度などの指標を用いて人々の行動に現れた男児選好の実態を指摘している(李&李1987,あるいは李1987)。このように意識と行動のいずれの側面においても、現代韓国社会のなかに男児選好が存在することが示されている<sup>6</sup>。これらの資料は、質的に前

に示した民俗学的なそれとは大きく異なっているものの、韓国社会における男児の出生に対する特別な意識のあり方を知る一助として利用できると思われる。

さて、いろいろな形で確認された韓国社会における男児への固執であるが、それではこうした傾向あるいは心性はどのような背景と結び付いているものなのか、また今日的な社会状況の中でその背景はどう変っているのか、あるいは変っていないのか、以下においては、韓国の男児選好における伝統的背景とその現代社会での変容の実態を見ることにはしたい。

### 3. 男児選好の背景とその変容

韓国の男児選好を生み出す要因はそれほど単純ではない。男児への固執という現象に収束してくる要因の糸は、見た目より多様で複雑に撚り合わされている。しかし、一般にその背景は「父系社会における構造的要請の所産」として、一気にその核心を掴み出す、いささか急性な説明で片付けられることが多いようにも思われる。もちろん家系の継承は韓国の男児選好の核心となる要素である。しかし、韓国の男児選好はそうした構造的(族制的)な次元における問題としてばかりでなく、それをめぐって展開する老後の扶養や、祖先祭祀など、より現実的な次元の問題としても存在している。しかも、それらの諸要素は相互に複雑に関連しながら今日まで韓国の男児選好を支えてきたと考えられる。これから試みる説明の中では、男児選好に関連していると思われる背景を便宜的にいくつかの項目(要素)に分けて論を進めてゆくが、現実にはそれらは切り離すことの出来ない有機的な結び付きの上に成り立っていることを忘れるべきでないだろう。

(ア) 家内労働力あるいは老後の扶養者としての男児

家内労働力として男児を欲する場合、まず農(漁)業労働力としてこれを期待する場合と老後

の扶養者として期待する場合とが考えられる。いずれも父方居住が前提となる。前者のような期待のあり方は、従来の自給自足的な農業経営に見られたような家族内労働力を結集させて行う場合には、それなりの意味を持っていたと想像されるが、急激な産業化、都市化の進行する現代の韓国社会においてはあまり重要な要因とはなり得ないと思われる。これに対して親の扶養のための家内労働力としての側面は、韓国社会の重要な価値規範である「孝」とも深く結びついて見逃すことの要素である。

老親の扶養は儒教社会の伝統的な行動規範である「孝」の実際的表現として、昔から重要視されてきた子供の義務のひとつであった(崔 1982: 195)。親の方でも、老後に子供の世話を受けてはじめて自己の一生を完結したものと捉えた。特に長男の場合には、老親との同居はゆきとどいた孝行のために当然のこととされ、少なくとも、自分の老後を娘に頼るような境遇は極めて恥ずべきことと考えられていた(李 1990: 277)。理想的な家族類型として直系家族を志向していた伝統的韓国社会(李 1978: 42)では、最終的に両親は、長男夫婦と同居し、朝に夕にきめ細かな世話(孝行)を受けながら老いを迎えることを本来あるべき姿としていたのである。

では、今日の扶養の形態はどのように変化しているのだろうか。まず、両親との同居の様子から見てみよう。伝統的な扶養形態としての同居形態の変化を理解するためには、とりあえずは、三世代家族の比率の変化が参考になるとと思われる。韓国社会における三世代家族が全家族数に占める割合を人口センサス(世代別家族類型)から見ると、1960年: 27%, 1966年: 23%, 1970年: 22%, 1975年: 19%, 1980年: 16%, 1985年: 14%と確実に減少傾向にあることが分かる(韓 1989: 17, 金 1990: 11)。これは、その理由は別にして、少なくとも両親との同居を原則とした扶養形態の「受け皿」が全体として少しずつ減少していることを示している。しかしながら、これがそのまま社会全体の意識としての別居志向につながるわけ

ではない。いくつかの家族社会学の調査資料を参照すると、今日の韓国社会における別居志向の強さが指摘される一方で、高い年齢層での同居志向の強さも指摘されている(韓 1989: 60-61)。同様のことは家族政策研究の一貫として「老人扶養観」を調査した研究においても指摘されている(金 1990: 51)。このように、老後同居観については都市部と農村部との意識の違いも含め、世代や地域性などを考慮した、さらに細かい読み取りが必要と思われる。

次に、扶養者を長男に限定する原則の方はどうだろうか。例えば経済企画院の社会統計調査「老父母の扶養責任に対する態度」(1979, 1983, 1988年度分)を見ると、扶養責任を長男に限定する意見が全体の25%程まで減少し<sup>7</sup>、また、すべての息子たちが扶養責任を持つという意見も20%程度で微減の傾向にある。ただし、この長男への固執は回答者の世代が上がるほど強くなる傾向があることを付け加えておかねばならない。一方で、男女に関係無くすべての子供たちで扶養すべきという意見は1979年の6.4%から1988年の35.8%へと急激に増加している。ただ、老後の扶養者として娘を挙げた者の比率はつねに1%をきっている。特に娘を指名してそれに頼るということはないが、少なくとも長男やほかの兄弟の扶養の義務を限定するという原則が人々の意識の面で崩れつつあることが理解されるのである。以上、統計資料を通した極めて大まかな把握にすぎないが、今日の韓国社会における扶養のあり方の一端を見てみた。

家族社会学の韓南済も、やはり今日の韓国における扶養のあり方について、1962年以降の社会学的家族調査(韓自身の研究も含む)の資料に基づきながら、全体として「若い父母たちは子供と同居しながら経済的にも彼らに依存するという従来の考えから徐々に自由になり、子供と別居し可能ならば経済的にも依存しないのが望ましいという方向へその考えが変化している」(韓 1989: 62)と指摘する。しかし、それは子供は親に対する「扶養の責務を持っている」という考えが全く無いとい

うことではなく、「父母の扶養は子供の責任であるとはいっても、その扶養を必ず長男が引き受けるべきという考えは修正されねばならないという主張が提起されている」（前掲諸：62）ということである。いずれにせよ、今日の韓国社会における老後の扶養のあり方としては、性別や出生順位の重視という伝統的な儒教的規範にこだわることなく、変化する社会の実情に合わせた柔軟な対応が模索されている様子が想像されるのである。

#### （イ）家系継承者あるいは祭祀継承者としての男児

韓国の男児選好を促す基本的な要因として族制的背景が考えられた。周知のように韓国の族制においては、強固な父系血縁主義と世代主義とが大きな特徴となっている。それは長男による家（チプ）の継承という形で実現され、継承においては祖先の祭祀権が最も重要視されてきた（李 1978：255）。

家の継承すなわち祭祀の継承もやはり伝統的な儒教規範である「孝」と密接に結び付いている。子の親に対する孝行はその生前の扶養と死後の祭祀を全うしてはじめて完全なものとして見なされる。それゆえ、祭祀継承者としての男児を残せなかった家長は、ただ、死後に自分の祭祀をしてもらえないというだけではなく、これまで自分が担当してきたすべての祖先の祭祀を継承出来ないという祖先に対する大変な「不孝」をせおうことになる。それが宗家筋に当たる場合、責任は単に一家族内の問題にとどまらず門中全体の問題としての重大性を帯びてくるのである。

このように男児の固執を促してきた族制あるいは祖先祭祀上の必要性は、急変する韓国社会においていかなる状況に置かれているのか。少なくとも、男児を偏重する伝統的な家族制度が、都市化・産業化あるいは民主主義的な教育によって変化を迫られてつつあるということは家族研究者たちのほぼ共通した認識である。しかし、これは韓国の家族制度のすべての側面が同じように変化を被りつつあるということではない。通常、人びとの価

値意識と行動様式、さらに社会構造や制度が足並みを揃えて変化するとは考えにくい。実際、族制の中心的問題である家系の継承に関して、相対的に社会変化の影響を受け易いと思われる都市住民や学生たちの間では、家系の継承と男児とを結び付けて考える必要がないという意識がかなり強くなるかがえる（韓 1989：62-63 120, Lee 1986：243）。しかしながら、一方では、戸主相続や分家に関する民法は、男児を通しての家系の継承を明確に規定しており、伝統的な家族制度の基本は従来のものであるという指摘もなされているのである（韓 1989：63）。

さて、父系的族制の構造的側面に比して、祖先祭祀は具体性と日常性とを備えた生活領域であり、社会の変化に対してもより敏感な反応が予想される。この祖先祭祀も、扶養と同じく「孝」の実践として展開する行動であり、継承および実施に当っては厳格な性別原理と世代原理につらぬかれてきた。韓国の伝統的祖先祭祀は、その公的な継承者と祭祀の実施責任者を男子に限定するという原則によって、家族内での男児の存在を要請してきたわけであるが、これも急激な社会変動の中で新たな挑戦を受けつつあるようである。

韓国の祭祀生活に関する最近の研究としては、都市アパート住民を対象に行った祖先祭祀の変容に関する調査報告がある（朝倉 1988）。朝倉は伝統的祖先祭祀に変容を迫るとされる要因を大きく、都市化・産業化および家族変化の側面とキリスト教の普及という二つの側面に分け、さらに、それぞれの側面に関連する要因について整理、考察を加えながら、意識調査によってこれを検証しようとした。小論の問題意識に関連して興味深い点は、扶養の場合と同じように、祭祀責任者を長男に限定しようとする原則は崩れつつあり（半数以下）、次三男が担当してもよいという考え方が広がりつつあるという点である（前掲書：782-783）。さらに、娘しかいない場合の対応について、婿（娘の夫）に任せてもかまわないという態度が7割近くもあることは、実態はともかくとしても、祭祀と男児の結び付きを考える上では重

大な意味を持った回答であると思われる。

今日、男児の価値を高めてきたひとつの要素としての祖先祭祀そのものの維持が難しくなりつつある。まず、今日の「少数子供観」の普及と低出生率のなかで、すべての夫婦が平等に少なくとも一人の男児を確保することが困難になりつつある。都市化や産業化は人口の移動を活発にし、従来のような親族ぐるみの祭祀の実行を困難にしている。都市住民においては儀礼空間の確保が深刻な問題となる。またキリスト教の普及は、教義上の問題をめぐって儒式の祭祀とのあいだに何らかの葛藤を生み出す可能性を秘めている<sup>8</sup>。その他、合理的な価値観の普及と祖先という宗教的存在との共存も問題となろう。こうした状況は、男児と結び付いたかたちでの昔ながらの祭祀の継承をますます困難にするかもしれない。

## おわりに

韓国伝統社会における男児選好は、ある意味では比較的明瞭な構造を持っていたと思われる。基本的に、男児出生への期待は父系的族制における構造的要請として形成されたもので、男児はまず家（チブ）の継承者として必要とされてきた。同時にこの男児は、父母の扶養責任者あるいは祭祀担当者として、父母の生前から死後にわたって「孝」をつくり、儒教社会における理想的な行動規範を体現する存在でもあった。社会・文化的側面から見れば、韓国伝統社会における男児選好は、父系的族制を構造的基盤とし、さらに家族関係の儒教的規範である「孝」をイデオロギー的背景として成立したひとつの産育民俗と考えることができる。

しかし、急激な社会変動の中で、このような伝統的な構造や背景は変化の大波にさらされつつある。限られた資料からではあったが、今回、人々の意識や行動の中に未だに存在する強い男児出生への期待を確認することが出来た。しかし一方で、これまでそうした傾向を支えてきた伝統的な背景が大きな変化の過程の只中にある様子もうかがわ

れた。では、韓国における社会変動は、今後、伝統的な男児選好のあり方にどのような影響を与えるのか、残念ながら、この点に関して、小論の範囲で十分に説明することは難しい。そのためには、前述してきた族制をはじめとする伝統的背景に加え、出生率の低下、社会福祉の充実、女性の地位向上、キリスト教の普及など今日的な要素ひとつひとつを十分検討した上での分析を行う必要がある。

ただ、小論において指摘できることは、まず男児選好という視点に、韓国の伝統文化の行方を見まもるひとつの指針としての役割が期待できるということがある。父系的族制と儒教思想をもとに成立していた伝統的な男児選好は、その基盤自体の変容と同時に今日的な関連要素を含み込みながら新たな展開を見せようとしている。そして、こうした新しい展開の背景となっている家族や儒教規範の変化やキリスト教の普及などは、まさに韓国の民俗文化が被りつつある変化のマクロな状況と期を一にするものに他ならない。男児選好は韓国の民俗文化全体の変容を具体的に見定めるための、ひとつの「窓」を提供し得るとと思われる。

さらにまた、男児選好は産育民俗の一側面として、民俗比較の新たな枠組としても有効である。このテーマに関しては、すでに人口学的関心から国際比較研究も実施されているが、その興味を中心は男児選好の実態の数値的把握あるいは心理的態度の分析にある。こうした関心の重点を、今度はその社会・文化的背景の方に置き換えることにより、民俗文化の比較を前提とする新しい分析視点として活用することが出来るように思われる。

中国では近代化政策のひとつとしての「一人っ子政策」が、はからずも前近代的な男児選好を顕在化させてしまった。一方、日本では男児よりも女児への志向が高まる傾向にある（阿藤 1988a, 1988b, 小林&唐沢 1989）。男児選好を中心とした比較の視点は、これらの東アジアの諸社会が共有するの民俗文化の一端をただ紹介するだけにとどまらず、変動するそれぞれの社会の伝統文化の

動態や独自の展開のあり方を理解する際にも大いに役立つものと思われるのである。

### [注]

<sup>1</sup>性的選好には、このような単純な表現の他に子供たちの男女構成比についての志向も含まれる。ウィリフムソンは子供の男女構成比まで考慮することによって親の子供の性別に対する期待のあり方をさらに6通りに細分化している(Williamson, N. E. 1976:18)が、小論では構成比にまで立ち入らず、単に「子供の性別に対する一般的な志向」という程度の意味で用いてゆくことにする。

<sup>2</sup>人口問題の施策に関わるものにとって、男児選好は人口抑制政策に対する阻害要因のひとつである。隣国の中国においても親たちの男児出生への固執をいかに解消させるかが一人っ子政策を成功させるための最重要課題のひとつである(若林1989:103)。人口増加率の先進国水準を達成しようとしている韓国でも、人口問題としての男児選好は今後もその実態と動向の分析を中心に研究の重要性を持ち続けると思われる。

<sup>3</sup>1960年代の人々の理想子供数および性比の調査の例としては、崔在錫の家族変容の調査の一環として行われたものがある(崔 1982:312)。ここでは都市部(アパート)と農村部に分けて集計が行われており男女同数を希望するものはいずれの地域でも24%程度で、相対的に男児を多く希望するものは両地域とも70%以上の数値を示している。ちなみに理想的な性比として最も多数を占めたのは都市部では男児2名に女児1名、農村部では男児3名に女児2名という結果であった。

<sup>4</sup>この他、韓は1950年代以降の家族社会学における子供観についての意識調査をフォローしながら、今日まで継承されている男児中心主義を指摘している(韓 1989:56-59)。

<sup>5</sup>人口学的観点から子供の性別選好を扱う場合には、「意識」と「行動」とを明確に識別した上で、その両者の間の連関、すなわち親の選好意識と出

生行動との関係を実証的(統計的)に促えることが肝要とされる(坂井 1987)。

<sup>6</sup>家族社会学の韓南済は最近の大学生の家族意識の調査のなかで理想の子供数と性比を聞いている(韓 1989:119)。結果として一男一女のバランス選好が男女学生とも半数近くを占める一方で、二男一女を理想とするのは、男子学生で約2割、女子学生が約1割で計1.5割程度にとどまっている。さらに男女の別無く一人だけという意見が男女合わせて2割近くあり、伝統的な男児選好観から脱しつつある都市(大邱)の大学生の意識を示しているようである。

<sup>7</sup>都市在住の高学歴女性の家族観の調査を行ったLeeも同様の傾向を見いだしている(Lee 1986:244)。

### 参考文献

- 秋葉 隆  
1954 『朝鮮民俗誌』 六・三書院。
- Arnold, F. and Kuo, E.  
1984 "The Value of Daughters and Sons : A Comparative Study of the Gender Preference of Parents" *Journal of Comparative Family Studies* Vol. 15, No. 2
- 朝倉敏夫  
1988 「韓国祖先祭祀の変化—都市アパート団地居住者を中心に—」 『国立民族学博物館研究報告』 13巻4号
- 阿藤 誠・中野英子・大谷憲司・金子隆一  
1988a 「結婚と出産の動向—第9次出産力調査(夫婦調査)の結果から—」 『人口問題研究』第187号
- 1988b 「結婚と出産の動向—第9次出産力調査(独身者調査)の結果から—」 『人口問題研究』第188号
- 今村 鞆  
1919 『朝鮮風俗集』 ウツボヤ書籍店(京城)
- 金 文卿  
1934 「出産に関する民俗」『朝鮮民俗』第2



号 (朝鮮民俗学会)

小林 臻・唐沢幸子

- 1989 「妊婦の意識調査(第一報)ー妊娠・出産・育児についてー」 財団法人 母子衛生研究会

Lee Dong won

- 1986 "The Changes in the Korean Family and Woman" *Challenges For Woman-Women's studies in Korea* Ewha Womans University Press

Lee, Hoon Koo and Lee Sung Jin

- 1973 "Boy preference and Family Planning" *Psychological Studies in Population / Family Planning* Vol. 1, No. 6 (KIRBS)

李 興卓

- 1988 「人口状況と将来展望」『現代韓国社会学』(韓国社会学会編 小林孝行訳) 新泉社

李 光奎

- 1978 『韓国家族の構造分析』(服部民夫訳) 国書刊行会

坂井博通

- 1987 「日本人の子供の性別選好について」『人口問題研究』第182号

坂元一光

- 1984 「韓国キリスト教の土着化における文化的新解釈試論」『九州大学比較教育文化研究施設紀要』35号

竹田 且

- 1983 『木の雁ー韓国の人と家ー』サイエンス社。

若林敬子

- 1989 『中国の人口問題』 東京大学出版会

Williamson, N, E.

- 1976 *Sons or Daughters : a cross-cultural survey of parental preference* Sage Publication

## [韓文]

金 泳謨

- 1990 『韓国家族政策研究』 韓国福祉政策研究所出版部

柳 岸津

- 1986 『韓国の伝統育児方式』 ソウル大学出版部

- 1980 『韓国伝統社会の幼児教育』 正民社

李 効再

- 1990 (1976) 『家族と社会』 経文社

李 奎植・李 任田

- 1987 「差異出産力と避妊実践率」『韓国の出産力変動と展望』 韓国人口保健研究院

李 興卓

- 1987 「男児選好が産産形態および家族規模に及ぼす影響」『韓国の出産力変動と展望』 韓国人口保健研究院

崔 在錫

- 1982 『韓国家族研究』 一志社

韓国経済企画院調査統計局

- 1990 『韓国の社会指標』

韓 南済

- 1989 『現代韓国家族研究』 一志社